



さて、人類の悩みの九割は人間

関係に起因すると言われています。そして、私たちの人間関係の持ち方は、皆それぞれ違いがあるわけですが、自分はどうして、このような人間関係の持ち方をするのかと良く考えてみれば、ほとんどの場合、親が自分に対して持った関係と同じか、正反対です。

なぜ同じかと言えば、それが刷り込まれているからです。なぜ正反対かと言えば、それが嫌だからです。しかし、正反対のつもりが一周して同じになってしまうことが多々あるのです。

人間関係の基本は、自らの親子関係です。ですから私たちが、子供と今持っている関係が、そのまま子供の将来の人間関係に反映されてくるわけ

です。

そこで、私たちは、子供がコミュニケーションの基本である、ことばによるキャッチボールが出来るようになってほしいのです。

人の話をよく聴いて、自分の思いを率直に表現できるようになれたら素晴らしいと思います。

そのために、親が子供に語りけることをします。そうすると子供はことばによって自己を表現することの喜びを体験していきます。

また、親が子供の話を聴いてあげると、子供の中からますますことばが引き出され、そして自分も他者のことばを聴けるようになります。

このように、親自身が子供とキャッチボールが出来ると、子供もキャッチボールが出来ようになります。もちろん初めから上手に出来ません。投げても取れなかったり、球がこちらに届かなかったりします。でも、どんなに未熟でも、キャッチボールをし続けたら、必ず上手に出来るように

なります。

大切なのは、常日頃から、キャッチボールをすることです。子供に語りかけ、子供のことばに耳を傾けるのです。

### 子供に語りかける

子供は、産まれた時にはことばを発することが出来ません。だからといってことばがないわけではないのです。ことばは人格ですから、人格がないわけではありません。

ですからことばを引き出してあげる必要があるのです。

ことばを引き出すために、ことばのキャッチボールをしてあげましょう。ことばが話せないのには？ と思われるかもしれませんが、出来るのです。なぜなら繰り返しますが、ことばは人格だからです。

まず語りかけましょう。産まれた直後から、い

え胎児の時から語りかけましょう。

### ことばの力

ことばには力があります。特に権威ある者のことばは、その権威の下にある者に対しては、大きな影響力を与えるという性質があります。

親のことばは、子供に対して最も大きな権威を持つていますから、影響力は絶大です。

親が子供のことを「おまえは馬鹿だ」と言えば、その通りに子供は自分のことを思います。親が子供に読み書きを教えながら、「おまえは頭が悪い、だからもっと勉強しなさい」と言ったら、頭が悪くなるようなことばの力の発しながら、頭が良くなることを期待している、これは矛盾です。

「何度言ったら分かるの？ 本当にあなたは分からない子供だ」と言ったら、本当に分からない子供になります。これも矛盾ですね。

「今は出来なくても、あなたは必ず出来るよう

になる」と言えば、出来るようになります。

子供の心は真つ白なキャンパスです。どんな色にも染まります。親が子供に語ることは、その一つ一つが心に書き記されていくのです。

聖書には天地創造の物語が記されています。創世記一章三節に「神が、光よあれ。と仰せられた。すると光があつた。」とあります。

このように、神が天地を創造されたとき、すべてはことばによって創造されているのです。神が発せられたことばは、皆その通りに出来事として、そこに起こるのです。

聖書は、神のことばです。ですからそのことばには創造の力があります。

私たち人間のことばには、そこまでの力はありません。いくら繰り返し叫んでも天地万物を創造することは出来ません。しかし、ことばには、創造的な力があると言うことは出来るでせしよう。

ですから子供に対してのことばというのは、子

供の人格を育てていく上で、とても大切な役割をもっているのです。

例えば、

\*友達からおもちゃを取ってしまった時。

「あなたはなんて意地悪なことをするの？ すぐに返しなさい。」

あるいは、

「それは、\*\*ちゃんのものだから返そうね。」

\*子供が大人の会話中にうるさくて困った時。

「なんてうるさい子なの、直ぐに静かにしないと承知ないよ。」

あるいは、

「何を話したいの？」

\*子供が決められた約束事を守らない時。

「何度言っても約束を守れない子ね。どうしたら守れるようになるのか？」

あるいは、

「なぜ守れなかったの？ 何か理由がある？」

子供を叱る時に、子供の人格に踏み込んではいりません。

「あなたは意地悪だ、うるさい子だ、守れない子だ」これらは不要なことばです。この部分を取り除くだけでもずいぶんと違ってきます。

私たちは、自らが親として持っていることばの力を、子供を呪うのではなく、祝福するために使いたいと思います。

### 指示よりも共感

親が子供に、ことばで語りかけることによって、子供は、ことばによって自分を表現することを学んでいきます。

子供を抱っこしながら、散歩しながら、どんな時でも語りかけてあげるので。

その時には、「指示的なことば」よりも「共感的なことば」で語りかけるようにしましょう。

「あれをしなさい、これをしなさい、これはだめ、あれはだめ」という指示をすることばではないのです。

むしろ今一緒に見ているもの、聴いているもの、体験しているもの、それらを親自身が考え、感じていることをことばで表現してあげることです。

散歩中にきれいな花を見れば「きれいな花だね」風が吹いてきたら「気持ちのいい風だね」、転んでしまったら「ちゃんと前を向いて歩きなさい」よりは、「痛かったね、一緒に歩こうね」と言った方が共感的ですね。

私の一番下の女の子は、とても自分をしっかりと持っています。ということは、大人からみると頑固に見えたり、わがままにみえたりします。しかし、それは自分を持っていることなのです。

まだ四歳くらいだったと思いますが、何かの薬

を飲む必要があったのですが、そのシロップがおそろしくまずいわけです。一度目に飲んだら、二度目は飲みません。娘は、まるでここに人生をかけているかのように全身で飲みたくないという意思表示をしてくれます。しかし、ここで子供の未成熟な人格を親が補う必要があります。子供の人格を尊重して、飲みたくないのなら、それでいいとは四歳の段階では言えません。

私は、とにかく語りかけます。なぜ薬を飲むことが必要なのか？「良薬口に苦しだよ」と分かるはずのない表現までして、とにかく飲む理由を説明します。そして、なぜ飲みたくないのかもしっかりと聴いてあげます。そしてこんなまずい薬を飲みたくないのは当然だと共感してあげます。最初は、まったくことばは耳に入らないのですが、しばらくすると娘が耳を傾けはじめたのが分かりました。そして、ついに娘は自分で納得して、飲むことを選びました。四歳の子供でもしっかりと

考えて選ぶことが出来るのです。

これは説得とは違うのです。説得ではなくて、あくまで娘が自分で考えて選ぶということなのです。

子供のことばに耳を傾け、共感し、そして理由をしつかりと説明すると、たいての場合、子供は自分で理解して、正しい道を選んでいきます。

### 心を聴く

さて「聴く」ということです。子供のことばを育てる一番の秘訣は、なんとと言っても聴くということです。聴けば聴くほど、ことばは引き出されてきます。

子供が小さくてことばが話せなくても構いません。それでも聴いてあげてください。

ちなみに「聴く」であって「聞く」ではありません。「聞く」は、単に音声として、情報として、そのことばを聞きます。

「聴く」は、漢字のごとくに、十四の心をもつて耳を傾けるのです。「傾聴」といいますが、心を傾けることが、聴くことなのです。

そこで、聴き上手になるためには、どのようにしたらよいでしょうか？

子供は小さければ小さいほど、ことばが明瞭ではありません。新生児のことばは、泣くことです。ですから、特に母親は、この時期に必然的にカウンセラーの訓練を受けます。この泣き方は、オムツかミルクか？ 何だろう？ 子供がはつきりと、僕はミルクが飲みたいんだと言ってくれたらどんなに楽でしょうか？

しかし、親は子供の全身を観察して、この子は何を言っているのかをキャッチしようとし、

ほとほと分からないこともあり、しかし、この分かるうとする姿勢が貴重なのです。

思春期になると、子供は親からみて理解不能な

ことば、服装、行動をし始めます。

そんな時には、この訓練が役に立ちます。「この子は、何を訴えているのか？」とにかく聴こうという姿勢を持つことなのです。全身で子供のことばを理解しようとするのです。

最初は、目に見える状況から入ります。オムツでもミルクでも痒い所もない。そこから今度は心を見始めます。ならば何か不安なこと、恐怖感を感じるようなことがあったのだろうか？ などと外側の状況ではなく、心のことばを聴き始めるのです。

「聴く」という作業は、ここからスタートします。とにかく一生懸命に心のことばに耳を傾けるという姿勢なのです。これが尊いことです。

### 聴き上手は、尋ね上手

井戸から水を汲み出すときに、まず呼び水を入れます。子供の心の井戸にも沢山のことばがある

のですが、呼び水を入れてあげると、豊かにことばが出てきます。

呼び水とは、尋ねることです。日本語では、聴くことと尋ねることが同じことばで表現されます。道を尋ねる、道を聴く、同じ意味です。つまり聴くことは尋ねることです。聴き上手は尋ね上手なのです。

新生児にも尋ねてください。そしてうなずいてあげるのです。それは、私はあなたのことばを聴きたいんだよ、ということをつかってもらうためです。

ちなみに子供が尋ねられても答えられないことがあります。それは、

「なぜ、こんなことをしたの？」と問われることです。なぜ、お皿を割ったの？ なぜ言うことが聞けないの？ なぜ静かにできないの？

このような質問は、子供には答えられないのです。たいてい黙って下を向いてしまいます。それ

は「なぜ、ここにりんごの実がなっているのか？」と問われることと同じで、りんごの木だからりんごの実がなるとしか答えようがないわけです。

静かに出来ないから、出来ないのであって、その行動に対して「なぜ」と問われても答えようがありません。

しかし、行動に問いかけられるのではなく、心を聴き始めると、ちゃんと理由が分かってきます。

「りんごが好き？」と尋ねたら、答えが返ってきます。「りんごのどんな所が好きなの？」と尋ねたらもっと答えが返ってきます。

尋ね上手とは、相手の人格を尊重した問いかけです。

何を考え、判断し、選んでいるのか？ どう感じているのか？

相手の心（人格）に対して問いかけると、ちゃんとボールは返ってきます。

何が好きなの？ どっちが好きなの？ どう感

じた？ 嬉しい？ 悲しい？

「なぜ、歯磨きをしないの？」と尋ねられても子供は答えられません。それを「なぜ、歯磨きをしたくないの？」と尋ねてると答えが返ってきません。

この違いは、「しない」という行動ではなくて、「したくない」という心に焦点を当てているからです。子供は、行動に関して尋ねられても答えられないのです。むしろ心を聴いてくれると、答えられることが多いのです。

このように心を聴くようにすると、ことばが引き出されてきます。

もう一つの聴き上手、それは親が子供の鏡になってあげることです。

子供のことばを同じように反射させるのです。

それによって子供は、自分の人格が受け入れられたこと、理解されたことが分かります。これはと

ても嬉しいことです。さらに、自分のことばを通して物事を客観的に考えることが出来るようになります。

子供が「困った」と言えば、「そう困っているんだね」「悲しい」言えば、「そう悲しいんだ」と。

問題を解決しようとする前に、まず共感してあげましょう。そして共感している印として、同じことばで返してあげるので。

あなたの言いたいことは分かったよ、ということ伝えるのです。

子供の中には、問題を乗り越える力が潜在的に備わっています。親が答えをすぐに提供すると、その力は育ちません。しかし、共感し理解してあげると、子供が自分で考えて、問題を乗り越えていく力を得ます。なぜなら生きる力とは、「愛されている自覚」から来るからです。

心と人格を大切に語り、聴く、これが子供のことばを育てることになります。文：関 真士